42. フィリピン貧困防災研修

SGH　フィリピン貧困防災研修を実施しました

本校 SGH 研修のハイライトのひとつであるフィリピン貧困防災研修。4 度目となった今回は、2018 年 1 月 28 日（日）～2 月 5 日（月）の 9 日間にわたり、高校 3～1 年生の GL コース/GJ クラスから定員を大きく越える希望者のなかから選抜された生徒 20 名と教員 2 名で実施しました。

1 日目

ニイノ・アキノ国際空港に到着後、NPO 法人アクセス(Access)様の現地スタッフと合流し、宿舎に向かいました。宿舎では、フィリピンの歴史や文化の概略を学んだ後、明日以降の行程について確認しました。

2 日目

この日は、パンパンガ州パサイグ-ポトロレ川流域のサンホセ・ミトラ地区を訪れました。この地域は、1991 年のピナツボ火山の噴火により、壊滅的な被害を受けた地域です。この噴火は、20 世紀最大の噴火といわれており、噴火前に 1745m あった標高は、噴火後に 1486m まで低くなったとのことでした。事前の噴火予知で、噴火による直接の人的被害は無かったものの、火山灰の降灰とその後の火山泥流によって村は埋まり、噴火後の人的な被害は 300 名を超えています。火山噴出物の総量は 70 億立方メートル、大阪府の全面積が 7m の火山灰で覆われるほどの量であったそうです。泥流を防ぐ巨大な堤防が日本の援助も受けて築かれており、その内側と外側の高さの違いが、泥流の威力を伝えるに十分でした。現在ではこの泥流も落ち着き、この被災地にも、火山灰を利用したブロック作りの工場ができ、人がいないために養豚場や

養鶏場のほか、ゴミの集積場も作られました。フィリピンではゴミの焼却が法律で禁止されているため、大規模なゴミの集積場が必要となります。集積場が作られてから、スカベンジャーもこの地域に移住するものが出てきて、現在に至るとのことです。この地域のほとんどの人が他地域からの移住者で、人口の 60%がブロック工場勤務、20%が養豚等の農業従事、15%がスカベンジャーとのことです。今回は、この地域のゴミ集積場を訪れ、スカベンジャーの方に直接お話を聞いたり、ホームビジットや小学校訪問を行いました。

ゴミ集積場訪問とスカベンジャーの方へのインタビュー

ゴミ集積場では、リサイクルできる(=売れるゴミ)とそうでないゴミの分別が行われています。強烈な匂いと大量のハエが集まるなか、学校に行けない子供たちがゴミを分別する姿がありました。実際にゴミ集積場で、ゴミをかき分ける様子を目の当たりにして、生徒たちは衝撃を受けました。腕時計や携帯電話など、ゴミの中から使えるものを見つけ、利用していることなども聞きました。しかし、ここで正式に働くことのできる MRF (Material Recovery Facility)に登録された方々は、州からの医療保険制度にも加入していて、無料で医療が受けられるそうです。わずかであっても一定の収入があり、食べることができ、家族と暮らすことができるのは幸せだといいます。

小学校訪問

この地区にある小学校は、今回の研修でお世話になっているアクセス様の支援で建設されたものです。建築後も一定の支援が行われており、2008 年に 32 名だった児童は、現在は 204 名となり、途中で 2 回増築されています。

正式なプログラムが始まる前から、生徒たちは、人懐っこい子どもたちと鬼ごっこなどの遊びに興じるなど、打ち解けた状態でプログラムが始まりました。

授業見学では、先生の問いかけに元気に返事する子どもたちの姿があり、学校に通えるという喜びに満ちている印象を受けました。また、コンピュータとプロジェクターを使った授業もあり、予想以上の教育の質が担保されていました。交流では、折り紙で紙飛行機を作って飛距離を競ったり、竹とんぼやけん玉、縄跳びなどで遊んだりしました。将来の夢を語る子どもが多く、生徒たちは教育の果たす役割について、改めて考えさせられたようでした。

校長先生は、日本の支援に感謝されるとともに、まだ教室だけでなく、教科書や教材が足りない現状などを話しておられました。

ホームビジット

生徒たちは、4 グループに分かれてこの地域の家庭を訪問し、お話を伺いました。自己紹介などで打ち解けた後、なぜここにきたのかなど、生徒からの質問に丁寧に答えていただきました。

多くの家庭でご主人がブロック工場で働き、奥様がスカベンジャーとして働くなど、共働きで頑張っておられます。噴火後に移住してきた方が多く、ミンダナオ島から移住してきたという家庭もありました。家はブロックで囲い、プラスチックやトタン屋根を乗せただけの簡単な作りです。マニラで働いていた時は、夜勤が主で、家族と過ごす時間がなかったといいます。水道やガスなどのインフラが全く整備されておらず、近くに市場や病院もなく、公共交通機関もないため、市場や病院に行くにも遠い街までバイクで出なければいけないにもかかわらず、ここでの生活の方が良いといいます。これらのインタビューを通じて生徒たちは考えたようでした。彼らの真意は短い時間ではわかりませんが、本当はもっといい仕事をしたいけれど、その夢を子供に託しているという言葉に、今の生活への苦悩が表れているのだと。

宿舎に戻ってから、フィリピンの教育の現状等について、アクセス様のスタッフからお話を伺いました。若者の人口比率が高いためか、大学を出ても職につけるとは限らないけれ

ども、大学に行かなければ良い職につけないといいます。だから、子どもに教育を受けさせなければ、貧困の連鎖が起こってしまいます。それがわかっていても、教育費が払えないから学校に行けない子どももまだいるということです。大学になると授業料は高く、せっかく進学できても奨学金のハードルも高いために、授業料を払えずに中退する例も多いようです。

生徒たちにとって、改めて勉強ができる環境のありがたさと、貧困層への教育の重要性を考える機会となったようです。

3 日目

この日は、Rizal Park を散策した後、フィリピン民族博物館、フィリピン国立博物館を訪問しました。午後からは、スモーキーマウンテンのあるトンド地区の青年会(Alliance of Concern Youth and Students)グループの方々からお話を伺いました。夕食後には、2011 年度の本校卒業生で、立命館大学国際関係学部を経て、Palette という NGO においてフィリピン在住で活動している山下星夢さんのお話を伺いました。

Rizal Park と博物館訪問

フィリピン人のスペインからの独立機運を高めたことで知られ、同国の国民的英雄でもあるホセ・リサール(Jose Rizal)が処刑された地にある公園で、彼の記念碑は、衛兵に守られています。この公園に隣接して、フィリピン民族博物館や国立博物館、日本庭園などの文化施設が集中してありました。博物館では多様なフィリピンの文化、例えば言語、カゴや織物の素材・染料の地域多様性について理解を深めました。

多言語国家であるフィリピンは、アメリカ統治時代に英語教育に傾注した歴史があり、現在に至っていますが、一方、英語のみしか話せないということがフィリピン人としてのアイデンティティーを見失ってしまうという観点から、国語としてのフィリピン語、母語としてのタガログ語を重視する姿勢も有しています。このことは、フィリピンの歴史的背景を学ぶことで見えてくることであり、言語は単なるコミュニケーション・ツールとしてのみ機能しているという浅薄な言語観ではなく、言語は文化そのものであるということを再認識しました。

トンド青年会との交流

アクセス様の活動の一つに、学校の PTA を組織したり、トンド青年会のような地域コミュニティを立ち上げ、活動を支援することがあります。それを通して、意識を高め、お互いに高め合う環境を作りたいといいます。今回は、青年会活動をしておられる 4 名の方々に宿舎まで来ていただき、お話を伺いました。

最初は全体向けに、トンドの現状と「麻薬撲滅のために警察は容疑者を射殺して良い」とする政策が生んだ悲劇についても学びました。この影響で、今回の研修では昨年度まで実施していたパヤタス地区の家庭訪問を取りやめた経緯があります。その後、グループに分かれて詳しくお話を伺いました。

一番若い方は 18 歳で、1 歳のお子さんを連れていました。父親は殺されてしまい、母親はドラッグで警察に捕まり、子どももできて学校に行けなくなったそうです。子供が大きくなったら勉強をし直し、英語の先生になるか、プロのダンサーになりたいそうです。

23 歳の女性の方も多くの困難があったといいます。彼女の父親は亡くなっていて、多くの困難のなか、母は麻薬使用で警察に捕まり、17 歳で一人で何もかもやらなければならなくなったそうです。高校に通っていましたが、生きるためのお金が必要で、働きながらの通学です。何度も倒れ、強くなっていったといいます。やがて、結婚し子どもができたため学校に通えなくなったうえに、若いご主人は未成熟で、コンピュータゲームにはまり、あまり働かないとのことです。明るく振舞っていた彼女が、途中涙を見せ、話が止まる場面もありました。

また、別の 21 歳の女性は、母に会ったことがないと言い、父親の収入だけでは生活できず、13 歳でスカベンジャーになったそうです。学校に行っていたので、働くのは夜 8 時ごろから未明の 3 時ごろまでだったそうです。家族のために、将来は日本に来て、農業の勉強をしたいと夢を語ってくれました。

同じく 20 代前半の男性は、貧しいのでスカベンジャーにならざるを得なかったといいます。親と同じ生活を送るのだと諦めていたともいいます。ドラッグ中毒になっていた父親の暴力がひどかったために、家にも寄りつかなくなり、刑務所にも入っていたそうです。母親に夢はないのかと諭され、教会の活動を行い更正していきました。父親も教会のおかげで更正したそうです。現在、奨学金をもらいながら ICT の勉強をしており、将来は先生になりたいと夢を語ってくれました。

生徒たちは、同年代の彼らが置かれた境遇に衝撃を受けました。それにもかかわらず、夢を持って歩んでいる彼らを前にして自分たちの甘さにも気がつき、喫緊の世界的社会課題であり本校の SGH テーマの一つでもある「貧困の撲滅」について、今後もしっかり考えて

いくことを決意していました。

Palette の活動

山下さんは、一生懸命働いても報われない世界があることを知り、機会の不平等の解決に貢献する仕組みを作りたいとの思いを持って活動されています。フィリピンでは、失業者の半分が若者であるといいます。特に、経済的な弱者は負の連鎖の中にあり、「自分はどうせ努力しても無駄だ」と思い、最初から夢を諦めてしまうようです。これを断ち切り、「自分もあんな風になりたい」という貧困層における成功のロールモデルを作ることが Palette の目標の一つであると熱く語っていいただきました。

Palette の事業の一つは、パヤタス地区などの貧困層で大学中退者を対象に職業訓練を行い、Palette の運営する Palette School で英語教師として働いてもらうというものです。https://www.pa1ette.org/school/

数年働いてもらった後は、Palette から離れ、他の語学学校か民間企業で働くことができるようにサポートして行く予定とのことでした。実際に、トンド青年会の中から英語教師となり、活躍を始めた方もおられるとのことでした。その一人が、先ほど話を聞いたトンド青年会の先輩であることも知りました。

生徒たちは、自分たちの先輩が、フィリピンで実際に貧困層の問題を解決するために活動していることを知り、彼らにとってのロールモデルとなったようです。山下さんのお話の後、生徒たちからの質問が絶え間なく続きました。そのことが、生徒たちが山下さんの活動に深く共感したことを示す証左だと思います。

4 日目

この日は、トンド地区およびスモーキーマウンテン周辺を車窓より視察し、トンド地区にある職業訓練高校(Antonio J. Villegas Vocational High School)を訪問しました。その後、マニラでの研修を終え、レイテ島に向かいました。

スモーキーマウンテンは、閉鎖されてから時間が経つため緑に覆われつつあり、ゴミの山とは思えない様相です。しかし、その周辺は、一部の人たちが他のゴミ集積場に移住したとはいえ、今も変わらない生活がありました。仮設の家や無造作に積み上げられた住居、道の真ん中でゴミ収集車のゴミをスカベンジャーたちが拾っている様子も見ました。港に停泊するゴミ運搬船に多くのスカベンジャーの仕事の場が移ったようですが、今もなお、ゴミからのリサイクル品を売る店が立ち並んでいました。

職業訓練高校へは、大通りから数分の距離を歩いて行きました。この学校は、トンド地区に住む若者に、就労するための技術を教える目的で作られています。電気技術のコースから美容のコース、料理や菓子づくりのコースなどさまざまなコースがあり、生徒たちと交流しながら授業見学を行いました。美容のコースでは、職業訓練高校の生徒に髪の毛を編み込んでもらい、菓子づくりのクラスでは、クリームを使ってのケーキのデコレーションを体験しました。ここに通う生徒は、先に視察した劣悪の環境下で暮らす子どもたちです。それにもかかわらず、圧倒されるほどの彼らの持つエネルギーに驚き、学校をあとにしました。

レイテ島では提携校のフィリピン・サイエンス・ハイスクール・イースタン・ビサヤキャンパス(Philippine Science High School - Eastern Visayas Campus　以下 PSHSEV)があります。夜遅い到着であったにもかかわらず、空港で大歓迎を受け、学校に向かいました。ホストファミリーと出会い、歓迎の夕食会の後、それぞれの家庭に分かれていきました。

5 日目

この日は、提携校である PSHSEV の生徒たちとの交流が中心でした。この学校の生徒は、理系の生徒が中心です。この地域の生物多様性は高く、島嶼であるがゆえに島毎に特有の

生物も存在します。また、生物地理学的に東洋熱帯区の東端にあたることもあり、生物相や生態学的な研究材料の宝庫です。それにもかかわらず、分類学や生態学的な研究が遅れており、同校はそこに着目した研究に取り組んでいる生徒が多くいるとのことでした。

本校生徒たちは全校集会で紹介されたのち、歓迎のパフォーマンスを披露していただきました。生徒たちの拍手や歓声を受け、本校の訪問を歓迎していただいているとの実感が湧いてきました。その後、バディ生徒の属するクラスで授業を受けたほか、フィリピンの民族楽器を体験し、１曲を合奏できるまで練習しました。バディの生徒は、本校の生徒に寄り添い、わからないことがあればすぐに説明してくれたり、困ったことを解決してくれたりしてくれます。生徒たちはそのホスピタリティの高さに驚いていました。

6 日目

この日はタクロバンでのフィールドワークが中心でした。まず、サマール(Samar)島とレイテ(Leyte)島の間のサン・ファニーコ(San Juanico)海峡をまたぐ、全長 2600m のフィリピンで一番長い橋を訪れました。この橋は、マルコス元大統領がイメルダ夫人の出身地であるレイテ島にプレゼントしたといわれていますが、日本の技術および経済支援によって作られたものでもあります。両島の頭文字の L と S が橋のカーブに取り入れられた美しい橋で、1969 年着工、1973 年に完成したといいます。橋上からは海峡の潮の流れによる渦潮やマングローブも観察できました。これらの説明は、すべてバディ生徒が本校生徒にしてくれたもので、彼らの豊富な知識に舌を巻いていました。

この SGH フィリピン貧困防災研修が始まったきっかけは、観測史上過去に類を見ない台風ヨランダ(Yolanda 最大瞬間風速 105m)が 2013 年 11 月にレイテ島タクロバンを直撃した時、交流のあった PSHSEV にも体育館の屋根が吹き

飛ぶなどの大きな被害があったと知ったことにあります。ここレイテ島のタクロバン市では、80%近くの家が倒壊し、インフラも壊滅状態だったといいます。被災地に何かをしたいという思いに加え、本校の SGH のテーマである、「防災」について考える取り組みの一環として、被災地を訪れる活動を続けて来ました。

次の目的地は、Eva Jocelyn 号のメモリアルです。港に係留されていたこの船は、台風ヨランダの強風と高潮、高波によってこの場所まで、家々をなぎ倒しながら打ち上げられたそうです。その記憶を伝えるため、船の先端部分をメモリアルとして残しています。この上から海側を見ると、破壊された鉄筋コンクリート造りの建物も確認でき、台風のエネルギーの大きさを再確認できました。

次に、昨年 12 月に襲った台風の被災地を訪れ、被災者の方のお話を聞きました。この取り組みは、本研修後半のメインになる部分です(内容は後述)。

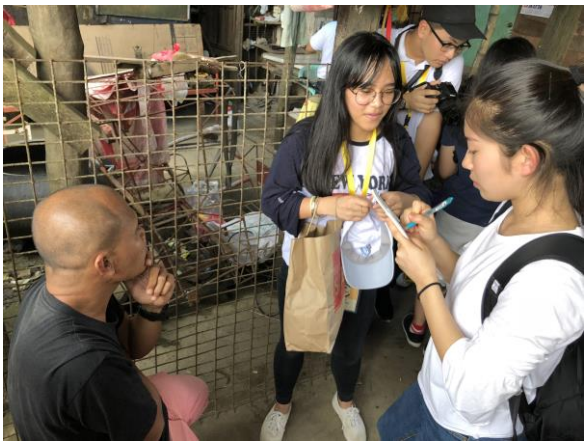
次に、Santo Nino Shrine and Heritage Museum を訪れました。ここは、マルコス元大統領がイメルダ夫人のために建てたもので、内装や保存されている美術品は素晴らしく、元大統領の力を象徴する建物です。台風ヨランダの影響も少なからずあり、美術品の保存状態は決して良いとはいえませんでした。

最後に、第二次世界大戦での激戦地でもあったこの地に、マッカーサーが最初に上陸した場所、MacArthur Landing Memorial を訪れました。マッカーサーがフィリピンに再上陸し、その後、日本軍の掃討作戦を開始することになったことなどを学びました。「外を知るということは内を見直すということ」。生徒たちは、ここでも歴史と文化のつながりを意識せざるをなかったようでした。

台風被災地訪問

昨年 12 月の台風被害を受けた地区を訪問して、台風の大雨で崩落した土砂の防護壁を視察した後、一人につき一被災家庭にインタビューをし

ました。インタビューは、PSHSEV のバディ生徒の通訳で、英語からタガログ語にしてもらうことで行いました。被災現場では復旧工事もされていますが、被災から日が浅く、崩れた防護壁が谷間に密集する家々を押し潰したことを容易に想像できる状態でした。



防護壁が倒れて母と妹を失った女性は、雨が降ると今でも当時を思い出し、とても怖いと言っておられました。60 代の男性は、今回の台風は前日まで晴天であったために予測しておらず、避難が遅れたと語っておられました。また、まさか防護壁が倒れるほどの地滑りが起きるとも思っておらず、避難しなかったものもいるといいます。それでも、近くの学校に避難できた人も多くおり、そうでなければ、もっと人的被害があっただろうとのことでした。家を失っただけでなく、地域の井戸が潰れてしまい、水の確保が今でも大変なようでした。政府の援助は完璧といえないまでも充実しており、米をはじめとした食料や衣服が配られ、シャワーも移動施設で数日に 1 回利用できるとのことです。しかし、コンロを数家族で共有するなど不便な生活が強いられており、以前の生活に戻るには、まだ時間がかかりそうとのことでした。

祖母が亡くなり孫はそれがトラウマになった、雨が降ると眠られないなど、精神的なケアが必要にもかかわらず、そこまでは手が回っていないようでした。被災者の皆様のお話を伺う今回の活動が、少しでも精神的なケアにつながることを願ってやみません。なかには、ここが自分のふるさとなのでここで暮らし続けたいと話す方もいらっしゃいましたが、多くの方々がこの危険な地域を出て行きたいし、安全なところに家が欲しいと言っておられました。

「今回自分たちにできることは何か」。生徒たちは、事前学習のうちから様々検討をした結果、食料品や服など事前に支援物資として持ってきたほうが良いとお聞きした品物をお礼にお渡しし、被災地

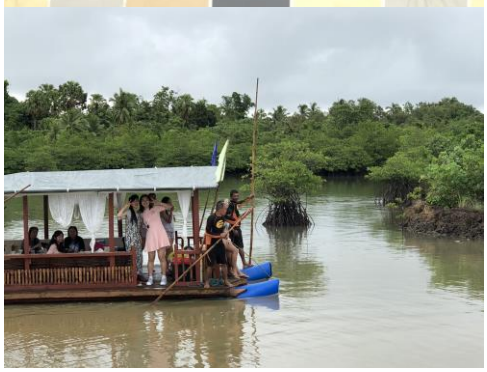
をあとにしました。

SGH 東北復興防災研修での学びでもそうでしたが、生徒たちはいつ再度被災するかわからない地域において、避難する・しないが明暗を分けている事実を知り、防災教育の必要性を強く感じたようです。

7 日目

この日は、PSHSEV で過ごす最終日でした。3 種類の野菜の色素を抽出して分離する実験や、対戦ロボットの製作とプログラミングなどに取り組みました。授業終了後、フェアウェルパーティーが行われ、生徒全員にサーティフィケートが手渡されました。パーティーでは、本校の代表生徒が滞在の感想を述べると共に両国の文化紹介も行われました。本校の生徒たちは、「是非再度訪問したい」「台風災害の大きさを目の当たりにし、避難する重要性と防災教育の重要性を痛感した」など、思い思いの考えを伝えていました。最後に We are the world を全員で合唱し、再会を誓い合いました。

8、9 日目



日曜日であるこの日は、ホストファミリーと過ごすことになりました。近隣のビーチやマングローブ林の中にある保護施設、鍾乳洞などにホストファミリーと出かけ、レイテ島滞在を満喫しました。帰国便は早朝であったにもかかわらず、多くの生徒たちが見送りに来てくれました。この研修を通して、まさに生涯の友を得られたのではないかと思います。

この研修は、貧困と防災という社会課題について当事者性を如何に涵養するかという本校 SGH の大きな教育的問題意識から出発し、到達した企画です。机上の理論を学んでわかったつもりになり、したり顔で他国の支援や共感を表明したりする。そのような姿勢が新たなバリューを何も生み出さないということを痛感していた我々は、一人ひとりの「心に灯をともす」ために、何度も何度も現地を訪れる体験を繰り返すことを追求してきました。ただし、「異文化体験」が必ずしも「異文化理解」にはつながらないという現実を受け、体験したのちの感情を言語化すること、他者の気づきを知り、また、自己のそれを他者に伝えることなどの事後学習などの取り組みが「異文化理解」に繋がる、地道ではあるが確かな道筋だと考え、これからも様々な機会の提供をしていきたいと思います。